

第二章 終戦後から小学校まで

すべてのことに勝つ必要はなく、大半のことに負けないように努力する

終戦後、三重県久居から父母の郷里の滝野町に帰って少し落ちついた頃、西村の祖本家で、父の従兄にあたる西村真二という方が、大阪大学微生物研究所に勤めていたので、その伝手を頼って、父に連れられ、大阪中之島の阪大病院に、毎週一回、六カ月余り通院した。西村真二は、後に大阪大学教授にまで出世された郷土の偉人で、クリスチャンであった。生涯、らい病の研究に従事し、勲三等叙勲の榮譽に浴した。

父はJR加古川線で大阪に行き、大阪駅から阪大病院のあった中之島まで、徒歩で五歳児をおぶって通院した。勤務先をどんな理由で休んだのか分からないが、父母をはじめ戦後生まれの二人の妹を加え六人になった家族は、みんなそれぞれ厳しい生活の中で、私が少しでも歩けるようになることを必死に祈ってくれたに違いない。

両親の看病や激励の甲斐あって、健康状態はよくなったが、足の方はあまり丈夫にならない

まま五歳になると、地元の天理愛児園に行くようになった。といつても、母の送迎で行ったり、行かなかつたり、本当はほとんど行っていないらしい。

しかし、この頃の思い出は妙に鮮明で、教室の二階から滑り下りる長い滑り台があったことや、教室から運動場につながる階段に手すりがなく難儀したことなどを覚えている。

昭和二十三年になり、小学校にあがる年齢になったが、身体的就学困難を理由に一年間の就学延期を願い出て、翌年の昭和二十四年から加茂小学校に入学することになった。すぐ下の妹とは同じ学年になった。

当時の加茂小学校（現在の加東市立滝野東小学校）は、大人でも困難なほどきついコンクリートの上り坂があった。現在は別の場所に校門が作られ、この坂は使われていないものの、私が一年、二年の間は、母が自転車で送迎をしてくれた。

三年生になった頃、父が神戸の大丸百貨店で中古の子ども用自転車を買ってきてくれた。不自由な右足は、ペダルの上に乗せるだけで、自由のきく左足で強くこぎ、何とか自転車に乗れるようになった。

ところが、このきつい坂が上れない。そこで坂の下の三村さんのお宅に自転車を預けて、そこからは徒歩で、その坂を三十分かけて上った。手すりのないコンクリートの坂を、右に左にと斜行しながら、休憩しながら一気に上る。早く登校しないと他の生徒に見られて恥ずかしい

し、集団登校のじやまになる。

当時、この坂をオートバイで爆音を立てながら上がっていく若い先生がいた。早く十六歳になつて原動機付き自転車に乗りたいたと思つた。

自宅から学校まで二キロくらいあるが、登下校の途中で、三歳年上の筒井さんは、よく自転車の後ろを押してくれた。今でもよく覚えていゝるし、感謝している。これは四年間続いた。

しかし、このきつい坂のおかげで得たものは多い。今の言葉でいえばすごいハビリになり、脚力が強くなつた。何をしても遅いし、できないこともいっぱいある。そこで「人と同じようにやろう」と努力したように思う。そのためには、人より先に移動や準備をする。特に、朝礼のある日は早く運動場に出る。終わる頃には先回りして教室に移動する。知恵は働くものである。

この頃の私は「人に勝つことより、人と同じようにする」ことに気をつけていた。今でもよく思うのだが、「すべてのことに勝つ必要はなく、大半のことに負けないように努力する」ことが大切である。他人との競争において自分の状況が劣位にある人は、相手に勝つことなど考えずに、相手と同じことをやろうと努力すればよい。いったん相手と同じなれば、後は運と才能の問題である。

自分の状況が優位にある人は、努力しなくてもできることは多い。私のように努力しないと

歩けない者は、せめてもう少し歩けるといいかと羨ましく思うが、仕方のないことは諦めざるを得ない。小学校では、何人かの友だちに、思い出すのもいやな雑言を浴びせられた。これにはなす術もなく耐えて諦めた。

昭和二十八年に父が自宅を建てた。それまでは西村本家の借家にいた。田んぼの真ん中で、周りに何もなく不便で、そのうえ、駅からはJR加古川線の踏切を越えて、坂をのぼりつめたところの一軒家であった。父は、この高台の「難所」から少し南の現在地を購入し、自宅を建てた。復員後八年、安月給の中でよく決断したものだ。

自宅の建物本体は新築であったが、壁は荒壁のまま、家具は本家から譲り受けたものばかり、家具のない部屋まであった。しかし、本家の「支配」から独立して、西村の新宅家になった。家族みんなが喜んだ。寒いながらも、暑いながらも、楽しい我が家であった。

この新しい家の前に幅一メートルくらいの農業用水路があり、夏になると、ここで小鮒やドジョウ、時にはナマズを獲って遊んだことは楽しい思い出である。もちろん一人ではできない。元気で、よく気の合う友だちが寄ってきて、水路を上下二カ所、土や石で堰いて、中の水を替え出す。そうすると、石積の擁壁の穴から獲物が出てくる。今では考えられない、嘘のような本当の話である。

豊かではないが、貧乏ではない我が家は、稲作もしていたし畑もあった。玄関横に鶏を飼っ

ていたし、家の前の水路でアヒルを飼っていたこともある。だれもが生活するのに大変な時代であった。

私が小学生であった昭和二十四年～三十年は、新しい義務教育が始まったかりで、学校も何かと急拵えで、先生の陣容はバラバラ。学徒動員で戦地から帰ってきた先生や、新制高校を出たばかりの先生から、年配の先生までいろいろな先生がいた。

六年生になって、修学旅行は行けないものとあきらめていた。どう考えても奈良、京都市内をみんなについて歩くのは困難である。ところが、直前になって「全員そろって行くのや」担任の大久保博司先生から、さも当然のごとく告げられた。ほとんどの友だちは歓迎してくれたが「お前も行くのか」と特定の友だちが言っていた。優位に立ちたい人のこの種の言葉はいつも耳に堪えた。

後から分かったことだが、別のクラスを担任されていた学年主任の藤本文治先生が、「わしが連れて行く」ということになったらしい。おかげで楽しい修学旅行を体験させていただいたが、六年生にもなって、帯で背負われて行くのは恥ずかしかった。

しかし、小柄の藤本先生に小学六年生の体は重かったことだろう。すでにいつも、いつも、誰かに助けられる人生が始まっていた。